

図書館通信 —47—

1979. 2

知識の館^{やかた}

大谷 幸栄

私にとって、図書館とはいかなる存在なのか。それは知的刺激を受ける所であり、そしてあの一種独特な静寂は、日常生活の種々の雑踏から逃れた安らぎと思考の世界に静かに移行できる場を提供してくれる所でもある。実際、専門書を読み耽り、疲れた時は遠方に青々と横たわる大谷の海を大きな窓ガラス越しに見やりつつ、分子・原子の世界を駆け巡った時期があったが、あの貴重な経験はやはり、図書館の恩恵の一つだと思ふのである。

その他、私の図書館利用法はいろいろである。まず専門に関して。図書館には、同事項を記述した数種の本があるので、それらを比較しその表現のうち自分にぴったりあったもの、つまり自分が最もその内容を理解できる表現を見出す。また図書の貸し出し期間なる制約を利用し、どうしてもこの期間に読んでしまうのだという励みにする。一般に良書と言われている本を図書館で吟味した後、自分でも気に入ったら購入する。雑誌は、広範な新情報を知るのに手取り早い、等。他の分野に関して。まず、あらゆる分野の本が同一場所に存在することは意義深いと思う。なぜなら、人間の多様な興味に沿って、次から次へと知的好奇心を満たしてくれるからである。以前、友人と二人でドイツ語ゼミを図書館でやったが、その際疑問を解消するために我々はできるだけものを利用した。独和辞典・独々辞典(Duden)・百科事典・文学書(ファウスト)・英和大辞典・哲学書等々。図書館ならではの広範な学習であった。また休暇に入り、時間ができるとよく絵画の本を眺めた。そこで接した東山魁夷の絵は、私に新しい色彩美を教えてくれた。

このように、私にとって様々な存在意義のあった図書館なのだが、残念なことに閉館時間が早い。何とか八時ぐらいにならないか。切なる要望である。

私は近頃、『大切なものは、日常生活の中にある。しかしその大切なものを見出すためには非日常的視点(つまり学問的・科学的視点)をもつことが必要である』と思うのである。そしてその非日常的視点を養うためにも、図書館の意義は大きいのではないだろうか。今後、自らの内に日常性と非日常性の調和と統一をとろうとしている私にとって、知識の館である図書館は卒業後も大きな存在意義を示すだろう。(理・化学・4)

性 主体制のある読書

谷口 慎一

最近、児童の本離れという現象がおこっているという。それが、テレビに代表される視聴覚メディアの著しい発達普及によるものであることはいうまでもないことである。大学生としての私も、ややもすれば流行性本離症におかされがちである。

それでも他方で、ビジネスマン諸氏の間では読書熱はかなりのものがあると聞く。彼らがその通勤のバスや電車の中で文庫本を読んでいる光景を、私もよく見かけるものである。そのような彼らの中でも、特に社会の第一線で戦っているエリートビジネスマンや管理職にあるビジネスマンは、かなり高度な企業経営の本をこなしていかなければならないのであろう。さらに、人間管理の仕事にたずさわるゆえに、自分の専門に関する限定された部門についての知識だけでなく、あらゆる問題について、広い知識と、深い理解を持つことが要請されている。すなわち人間性そのものに対する深い洞察力が必要とされているのである。しかしこのことはエリートビジネスマンのみに限られたことではなく、人間として生きていくなれば当然に要請されることである。

このように考えていくなれば、読書とは、単に専門書にとどまるだけでなく、歴史書や小説などの広い視野を養う本を読むことと理解すべきであろう。

情報産業が著しく発達した今日の情報化社会に

あっては、私達はいつでもどこでも読みたい本をすぐに手にすることができる。まったく便利な時代であるが、その反面、弊害もある。すなわちマスコミはその営利の追求を第一とし、とにかく読者の数をふやそうとし、そのため興味本位のいたずらにセンセーショナルな、浅い本がふえているということである。このような中で問われるのは、読者の一冊の本を見極める力と本に対する取り組みの姿勢である。ある識者は「書物を読みたいと思う熱心な人と、読む本がほしいと思う退屈した人との間には、たいへんな相違がある。」といったが、まさにそのとおりである。ではどのような姿勢で取り組みればよいのかというと、結局は、自らの人生に対する積極的な姿勢、つねに主体性を持ちつつける聡明な生き方から生まれてくるものである。明確な主体性に立つならば、一冊の本に書かれていることが、真実なのか、それとも虚偽なのか、良書か、悪書かを見極めることができるのであり、主体性のないままでの読書であるならば、せいぜい、氾濫する情報の中で自らを見失うのみである。さらに、自身の主体性が確立されていてこそ、読書によって得られた知識を身についた知識すなわち知恵・英知とすることができるのである。

ともかく読書をせぬ人は、人間として浅いものとなるということは真実であろう。だから、時間的に余裕のある今の学生時代に、積極的に読書に親しんでいきたいものである。(人文・法経・3)

化学天秤と海

森有正「経験と思想」を読んで

古城 寿子

私は、化学天秤を持って走っていた。図書館の4階でこれを使ってみたかった。もうすぐ夜が明ける。また、当り前の朝が来た。静かで荘厳な当り前の朝が。太古から、太古から、繰り返し、繰り返し、怠惰の、惰性の極み、飽き飽きするほどの静かな、荘厳な朝が。さっき、乱暴に扱った天秤が振れている。海は、遠くに、豊かに、私と何のかかわり合いもなく、無縁に、豊かに、青くある。天秤の振れがおさまってきた。その海が、この天秤に正しい水平さを与える。私。私と言えただだそれに感動しながら寒いだけだ。

他者性

「化学天秤と海」に描かれているのは、他者性ということ。この「他者性」という言葉は、森有正氏が使っておられたものをお借りしまし

た。上に描かれている私は何と他から隔てられていることでしょう。そして寒がっています。朝から、海から、そして天秤から。ここには朝と私との、海と私との、そして天秤と私との同一感はありません。慣れも親しみもまったくありません。ここに登場したのは自然、または器械であって人間ではありませんでしたが、人間に対しても同様です。私はあなたでは決してありませんし、あなたは私では決してありません。これを、「他者に徹する。」と森氏は言うておられました。ここまで来ますと、私と無縁に、遠くにあつて、豊かな青い海や、繰り返し必ずやってくる朝は、荘厳に思われました。また、これが当り前、自然であるとも思われました。その2つの自然の中で、天秤が釣合つて水平線と一致します。それを感動しながら見守る訳ですが、その時、先の鋭い疎外感を越えます。「自分の生きているこの現実そのもの、そこにある凡ゆる客観的なもの、主観的なもの、そういうものを凡て含んで、この現実そのものが一つの経験なのだ。そして、それ以外には、私にとっては何もない。」この森氏の言葉の後半を私なりに言い換えますと、次のようになります。「すべての客観的なもの、主観的なもの、そういうものを凡て含んで、今、ここで、私は現実を経験している。それ以上でもなく、ただそれだけである。」

さて、一年生の化学実験では、最初に化学天秤を学習します。私はその時かなわなかった夢をここに虚構として実現しました。しかし、これは本当の虚構なので、化学天秤の取り扱いには慎重に。決して持って走ってはいけません。(理・物理・3)

図書館私観

文献資料の収集および整理の面から

西村 治彦

図書館で本を借りれることは誰もがよく御存じだろうし、私もその恩恵に与かっているひとりですが、図書館には、その他に複写とレファレンスがあり、これがめっぽう重宝であります。

まず複写であります。私は月に十数種の雑誌(主に物理・数学関係)に目を通して見ます。諸物価値上がりの昨今、まともに買っていたら仮りに一冊700円としても一万円もかかってしまいます。それで月に一度か二度図書館の雑誌コーナーに詰めて一冊一冊入念に目を通し興味ある記事や論文を読むのですが、その中でどうしても手元

置いておきたいと思うものや時間をかけてじっくりと検討してみたいものは図書館のコピー機でコピーします。十数種の雑誌の中でコピーしたいと思う記事や論文はせいぜい5つか6つですから一論文20ページとしても、コピー代が全部で2000円余り。

コスト面では申し分ありません。さらに、毎月十数冊の本が定期的に増えていくのでは、狭い四畳半の下宿住いの場合場所塞ぎとなり、たまったものではありませんが、このように必要なものだけコピーして一部ずつホッチキスで留め、indexをつけて Clear Book にでも整理していけばそのような問題もありません。また、「えーと、あの文はどの雑誌のどこに載ってたっけなあ。」と捜しあぐねることもありませんし、雑誌の他のさして重要でないくだらぬ記事に気をとられて漫然と時を過ごすこともありません。

次に、レファレンスですが、文献探しにおいては非常に頼りになります。以前「ニュートンのプリンキピアの社会的・経済的根底」という表題の論文を見てみたくなってレファレンスの窓口に

行ったのですが、そのときわかっていたことといえば、著者名がヘッセンというだけで正確なスペルは知らない。また、その論文は『岐路に立つ自然科学』（洋書）に収められているが出版社も出版年も知らないというありさまでした。しかし、係の人の尽力の結果私はその論文のコピーを手に入れることができたのでした。最初、科学史研究上意義をもつ論文なのでどこかの大学の文学部か理学部あたりにあるかなと思っていたら、それがなんと名大の経済学部にあたりして意外に思ったものでした。ただ、他の図書館から本やコピーを取り寄せる場合、多少日数がかかるのでレポートの参考文献としてほしいときなど〆切りに間に合わないことがよくあり、それが残念であります。

大学の授業料を払う気がするのも図書館があるからです。授業だけではとてもとても。

P.S. 先日、図書館へ行ってみると、従来の便利なシステムが変わり、その結果、私のこの文章の説得力（特にコスト面）が減ってしまったのは残念です。

（理・物理・4）

階下の声

高橋 さえ美

時折近づいて来る足音は、私にかすかな期待を抱かせる。だが私には分っている。〈彼ら〉が迷路の果てのようなこんな場所に、私を求めて来たのではないことは……。

外へ出る唯一のチャンスを告げるのは、たった一枚の紙きれだ。それをもたらす〈彼ら〉の足音に、仲間たちは一喜一憂する。「また、あいつが呼ばれた。」「毎年、今頃になると呼ばれるはずだが。」「今度こそ、おれの番に違いない。」

とうに、私からは、そんな気力は失せてしまっている。出るといっても数時間、長くても一週間のことではないか。所属を表す、二度と消えない刻印が押された今となっては、それは一時の慰めだ。若いうちなら、それも生きる張りにはなろう。年老いた身となった今では、その日の存在することさえ滑稽だ。いったい、どんな用が私を待っているというのだ。

〈彼ら〉の私達に対する扱いは、確かに丁重だ。移動の時には車を使い、病んだ時にはすぐに治しもしてくれる。連れて来られたばかりの者は、それだけで自分が「選ばれた者」であるかのような錯覚を起こしてしまう。入ってすぐには、なんと

か言う名の個別票が、外に出る障害になるとは気付かないのだ。それと分った時には私と同じ、老いさらばえた役立たずと言う具合だ。

灰色の壁の無情さとスチールの仕切りの無限さが、私の時を止めてしまった。けれども、湿度調節用スチームの荒い息遣いが、私を眠らせてはくれない。〈彼ら〉の足音、はるかなざわめき、そして小窓からの弱い間接光と共に、私に生活のあったことを思い出させ続けるのだ。来る日も、そして来る日も……。

いやに今日は〈彼ら〉の足音が耳に障る。これでは一生をここで送る覚悟のできた新入り達の心が動揺してしまう。一方的に押し込んだだけでは物足りなくて、どうにかしようというのか。

いや、どうやら今日は、〈彼ら〉が仲間を率いて来る日のようだ。そう、〈彼ら〉は年に一度、「館内案内」と称して見回りをする。そして、ここにやって来るといつも同じ口調でこう言うのだ。「ここが書庫です。現在約〇万〇千冊の本が収められています。皆さんが、この本を利用したい時には、上のカウンターで、閲覧票に——。」

〈彼らの仲間〉の書くその紙きれが、すぐ私達を呼び出すことになるのは、思ってもいない。なぜなら、〈彼らの仲間〉は、まだこれから、その原簿になる個別票——目録とか呼ばれる——の使い方を、ずいぶん時間をかけて覚えるとか言う話だから。

（教育・国語・3）

資料紹介

近代中国史料叢刊

沈雲龍 主編

台北県永和鎮 文海出版社

1966-1973.

これは、文海出版社が近代史家沈雲龍氏の意見を聞いて、17世紀から20世紀20年代頃までの一若干20世紀20年代以降のものも含まれている一漢籍の歴史書を選び写真印刷し、第1輯から第100輯までにまとめ全1000号からなる一つの叢書です。

この叢書に収められている歴史書は、書冊の大部分が『大清歴朝實録』、或いは清末の外交史料・政治官報等の類は除き一これらの一部はこの叢書と前後して別個に出版されている一書冊の比較的数量なく、その上必ずしも稀覯本ではないが史料価値のある書物です。

全1000号の書物は、大別すると、(1)著名な官僚の上奏文を集めたものの類(奏議・奏疏・政書)、(2)著名人の遺著を後人が編輯、刊行したものの類(遺書・遺集)、(3)著名人の日記・伝記・年代記の類(日記・伝記・年譜)、(4)あるでき事やある時期の政治外交、社会経済情況等を専ら記述したものの類等です。

この叢書の出版によって、近代中国史の調査・研究が、いくつかの点で大変便利になりました。

第一は、歴史研究の基礎的なことですが、著名人の索引(『室名索引』、『別号索引』)、伝記集(『國朝先正事略』、『碑傳集』、『統碑傳集』、『碑傳集補』)によって、近代中国の著名人の経歴を容易に調べることができることです。従来は、近代中国の漢籍の歴史書は、稀覯本でなく、基本的なものでさえも、特定の大学の図書館・研究所、或いは専門の図書館でしか見ることができなかったわけです。

第二は、この叢書に数多く収められている著名人の上奏文集の類、例えば、洋務派官僚李鴻章の『李肅毅伯(鴻章)奏議』、『李文忠公(鴻章)事略』、『李文忠公(鴻章)朋僚函稿』、『合肥李氏三世遺集』等、を利用することによって、李鴻章の政治思想の一端を調べることができることです。しかしある個人の政治思想を全面的に調べようとするならば、この叢書に収められている資料だけでは必ずしも充分ではありません。例えば、先の李鴻章の場合には、基本資料である『李文忠公全集』を見る必要があります。

第三はあるでき事、例えば太平天国運動については、『賊情彙纂』、『太平天國史料』、『太平天國有趣文件』、『太平天國佚聞』、『太平天國詩文鈔』、『太平天國叢書十三種』、『太平軍・小刀會亂滬史料』、『平定粵匪紀略』、『平浙紀略』等を利用することによって、太平天国運動の一端を調べることができます。しかし、この場合も、全面的に調べようとするならば、必要不可欠な基本的な資料集『太平天國』中国史学会主編 神州國光社 1952年一本大学図書館に所蔵一を見る必要があります。

最後に、この叢書の欠点は、歴史書が必ずしも人物別、或いは項目別、時代別等何らかの基準に基づいて編集されていないので、ある人の政治思想、或いはあるでき事等を調べる場合に、部分的に調べることにしかできないことです。

なお、この叢書を利用する際には、体系的に編集されていないことから、本図書館そなえつけの文海出版社編輯部編『近代中国史料叢刊書名及編著者索引』(請求番号222.07/ki 41)を活用すると便利です。(教養部教官・伊原弘介)

Chemical Abstracts Service Source Index (CASSI), 1907-1974 Cumulative

Chemical Abstracts Service, c1975.

Chemical Abstracts (CA) は化学及びその関連領域における世界最大の抄録誌であり、現在、年間30万件以上の抄録を収載している。

CASSI は、このCAに1907年の創刊以降1974年までに収載された抄録の原文を収録している雑誌、技術レポート、会議報告、論文集などの一次資料の情報源についてまとめたものである。

記入項目数は、約5万4千件(そのうち約1万9千件が参照)で、略誌名のABC順に排列されている。

各記入項目の内容は、完全誌名、略誌名、誌名の変遷、使用言語、刊行ひん度、発行所などであるが、これに加えて世界における約400の図書館(主として米国の図書館。わが国では国立国会図書館と日本科学技術情報センターが含まれている)の所蔵状況が記載され、総合目録としての役割も果たしている。

基本略誌名は国際標準規格ISO 833に基づいているので、引用文献の略誌名の表記の基準として活用できる。また、従来使われてきた種々の略誌名、他の言語による誌名なども参照項目として採り上げられているので、引用文献から原文を検索する場合にも大いに役立てていただきたい。

参考までに二、三の例をあげてみると、

- Justus Liebig's Annalen der Chemie の基本略誌名は Justus Liebig's Ann. Chem. だが、従来使われてきた略誌名である Ann., Ann. Chem., Liebig's Ann. Chem. から参照により Justus Liebig's Ann. Chem. へ導びかれる。
- また、この雑誌は Annalen der Pharmacie, Annalen der Chemie und Pharmacie, Justus Liebig's Annalen der Chemie und Pharmacie という誌名の変遷を経て、現在の誌名となったことを知ることができる。
- 「日本物理学会誌」の完全誌名（基本略誌名も同じ）は Nippon Butsuri Gakkaishi だが、Butsuri や Proc. Phys. Soc. Jpn.*（英語の略誌名）からも Nippon Butsuri Gakkaishi への参照が作成されている。
- Journal of Japanese Chemistry は略誌名 J. Jpn.* Chem. で排列され、Kagaku No Ryoiki への参照によって、「化学の領域」の英語の誌名であることがわかる。

※ Jpn. は Japan, Japanese の略語であり、
 Jap. から Jpn. への参照も記されている。

（図・前畑）

(A) Guide to Reprints 1978.

Kent, Guide to Reprints Inc., 1978. 689p.

(B) Books on Demand.

Ann Arbor, University Microfilms International, 1978 - 1979. 3 vols.

苦勞して所蔵館を捜し、相互貸借やコピーで取りよせたりしなければならぬ場合が意外に多い。前者にはこうした入手難の絶版書の中で、世界中で復刊または復刊が予定されている図書、雑誌、その他の資料約 115,000 点が収録されている。400 社を越える世界中の出版社（日本では雄松堂、東京書籍、東亜ブック、フランス図書の 4 社が含まれている）で刊行したものを、図書は著者名順に配列され、著者名、タイトル、原刊の刊行年、出版社と価格が、雑誌やセットものはタイトル順にタイトル、巻号数、刊年、出版社と価格が表示されている。発行部数 200 部以上で入手可能なものが選ばれ、ペーパーバックの形でリプリントされたものは除かれている。1978 年版では可能な限り全てのタイトルに国際標準図書番号がつけられている。今春にはこれと対になる Subject Guide to Reprints が刊行される。

Books on Demand の方は、既に絶版になった 84,000 点の図書を収録しており、著作権の問題は

この図書の発行所である University Microfilms International 社が解決済みで、ここに収録されている図書についてはゼロックスやマイクロフィルムのいずれかのコピーが入手できる。Author Guide, Title Guide, Subject Guide の 3 冊から構成され、別に毎年 Updating Supplement が刊行される。UMI 社は Xerox 社の一部門で、「Dissertation Abstracts」の発行元であり、米国、カナダの大部分の学位論文が同様な方法で入手できるようになっていることはご承知の通り。

このほか International Bibliography of Reprints 全 2 巻が Verlag Dokumentation から刊行され（この方は近々本館に納入の予定）、これらによって、従来、直接著者から複写承諾書を貰ったうえ、所蔵館からコピーで入手していた手間と時間が省かれることが期待でき、利用者は勿論のこと、図書館にとってもありがたいことである。

（図・袴田）

—最近の受贈図書から—

逐次的刊行物

雑誌以外で逐次的に刊行される図書のうち主なるものを載せましたが、若干の欠があります。（）の中は請求番号です。

- 「防衛年鑑」防衛年鑑刊行会 1956—（390.59/B 62）
- 「文化庁年報」文化庁 1970—（317.27/B 89）
- 「衛星通信年報」郵政省・国際電信電話 1965—（694.7/Y 99）
- 「科学技術研究調査報告」総理府統計局 1961—（061/So 55）
- 「海外在留邦人数調査統計」外務大臣官房移住領事部 1973—（334.41/G 15）
- 「会社企業名鑑」総理府統計局調査部 1962—（670.35/So 55）
- 「研究大会記録」日本租税研究協会 1968—（345/N 77）
- 「国連アフリカ統計年鑑」アフリカ開発協会 1972—（354/Ko 49）
- 「国際統計要覧」総理府統計局 1957—（350.9/So 55）
- 「国税庁統計年報書」国税庁 1957—（345.059/Ko 54）
- 「小売物価統計調査年報」総理府統計局 1962—（337.85/So 55）
- 「個人企業経済調査年報」総理府統計局 1961—（605.9/So 55）（335.4/So 55）
- 「国の予算」大蔵省主計局 1949—（344.1/O 57）
- 「国と地方の文教予算」文部省 1964—（373.4/Mo 31）
- 「教育指標の国際比較」文部省大臣官房 1972—（372/Mo 31）
- 「NHK年鑑」日本放送協会 1959—（699/N 77）
- 「日本法令索引」国立国会図書館 1957—（320.39/Ko 49）
- 「日本の防衛」防衛庁 1972—（392.1/B 62）
- 「日本の統計」総理府統計局 1959—（351/So 55）
- 「ポケット農林水産統計」農林省統計情報部 1952—（610.59/N 96）
- 「選挙制度国会審議録」自治省 1975—（314.8/J 47）
- 「商業サービス設備投資動向調査報告」中小企業庁 1967—
- 「証券投資信託年報」証券投資信託協会 1969—（338.88/Sh 96）
- 「就業構造基本調査報告」総理府統計局 1956—（366.2/So 55）
- 「天理教年鑑」天理教教会本部 1975—（178.8/Te 37）
- 「特定サービス業実態調査報告書」通産大臣官房 1973—
- 「わが外交の近況」外務省調査部 第 1 号—（319.1/G 15）

司書資格を取得したい方へ

文部省が毎年特定の大学に委嘱して実施する夏期講習(約2ヶ月)を受講し司書の資格をとりた方は、受講申込の時期が大学によって異なり、6月で締切の大学がありますのでご注意下さい。詳細は参考調査係でご相談下さい。

学生の投書から

新しい経済の辞典を購入してほしい。何か調べようとしても経済辞典は1970年以前のものが多く、百科事典にたよるしかない現状です。大学の図書館なのでからせめて新しい平凡社または岩波の経済辞典を購入してほしいと思います。もちろん図書館の方をせめる訳ではありませんが。(2月5日)

ご指摘ありがとうございました。但し、平凡社、岩波の辞典はその後改訂されていませんので、とりあえず今回は、島野光爾・丸尾直美編「現代経済学の事典」、長谷田彰彦「経済学基本辞典」「完全体系経済学事典」、芳賀史雄等編「経済学用語辞典」、日本経済新聞社編「経済新語辞典1979」、オリエンタルエコノミスト編「経済用語と英辞典」、中山伊知郎「新版経済事典」、木村健康「近代経済学小辞典 第二版」、久武雅史等編「近代経済学用語辞典」、杉原四郎等編「マルクス経済学体系辞典」、星斌夫編「中国社会経済史語彙」の11点を発注しておきました。今後もお気付きの点がありましたらお教え下さい。

■附属図書館委員会報告

第7回 53.12.19

- (1) 図書館の基本問題のうち図書館経費の配分及び負担等の基準について現況の説明があり種々審議した。
- (2) 昭和53年度学生用図書購入費の追加配分を了承した。
- (3) 図書館地震対策関係資料について了承した。第8回 54.1.26
- (1) 昭和54年度指定図書購入費について
昭和53年度と同じ費用の分担方式を承認した。
- (2) 法経短大の図書館委員会への新年度からの正式加入を了承した。
- (3) 前回に引続いて、図書館経費の配分及び基準について種々検討した。
- (4) 新年度から施行される「文献複写業務実施要項」について説明があった。

■利用統計(昭和52年度)

1) 文献複写統計(ゼロックス)

注: 電子リコピーと外国への複写依頼は除く。

区分	本館			浜松分館			
	人数	件数	枚数	人数	件数	枚数	
依頼	学生	135	396	3,055			
	教官	175	1,812	11,549	242	386	5,253
受託	学内	18	23	137	58	58	899
	学外	302	580	4,300	223	244	2,828

2) 電子リコピーの使用状況(本館)

区分	昭和52年度			昭和51年度		
	人数	件数	枚数	人数	件数	枚数
教養部	843	1,273	5,445	431	910	5,642
人文学部	965	1,753	13,321	318	902	7,193
教育学部	840	1,387	7,159	306	750	4,786
理学部	187	371	2,456	38	75	833
農学部	18	26	159	17	37	210
院生等	89	149	1,107	33	88	494
教職員等	57	82	712	29	103	696
合計	2,999	5,041	30,359	1,172	2,865	19,854

3) 外国への複写依頼(本館)

区分	件数	枚(コマ)数
学生	17	28
教官	67	4,597
合計	84	4,625

4) 相互貸借冊数

区分	本館	浜松分館
貸出	6	0
借用	148	4

(マイクロフィルム1コマは1枚として計算)

■教官著作寄贈図書

池田隆正(教育学部)

「復活の歌—生存の本質経験・復活」池田隆正著 北樹出版 1978(104/I 32 開架)

坂本重雄(人文学部)

「地方公務員共済の理論と実務」坂本重雄等編 労働旬報社 1978(318.13/A 53 開架)

小和田哲男(教育学部): 本田隆成(人文学部)

「静岡県の歴史=中世編=」小和田哲男・本田隆成編 静岡新聞社 1978(215.4/Sh 94 開架)

お知らせ(本館)

(1) 春季休業中の長期貸出

貸出冊数: 4冊まで

貸出開始日: 2月19日(月)

開始日以前に特に貸出を希望する場合は申出て下さい。但し、卒業見込者及び工学部3年進級予定者には長期貸出はいたしません。

返却期限: 4月16日(月)

(2) 休館

3月5日(月)~7日(水)